

「ユーカラ座」：ストーリーと歴史

床明

2024年9月25日

聞き手：谷地田未緒、笹村律子

構成：谷地田未緒

——：今日はよろしくお願ひします。たくさん資料も持ってきていただいてありがとうございます。まずユーカラ座はどのような経緯で立ち上がったのですか？

床明：1968(昭和43)年に阿寒アイヌ民族文化保存会を結成したとき、当時の役員が保存会でどういうことをやるか議論したんです。その中で、アイヌ舞踊研究保存と、アイヌ語研究、それからユーカラ座の3部門を置くということで始まっています。

——：古式舞踊だけでなく新しい作品を作ろうという発想はどこからきたんでしょうか。その当時は、周りにも新しいものを作っていた例はあまりなく、先駆的なことでしたよね。

床明：当時の先輩たちのアイデアや考え方が素晴らしいんですね。その時の代表が、四宅豊次郎さんと床ヌブリ(和名は昭一)の二人が中心となって、古式舞踊とは違うのものをやっていたと、ユーカラ座を立ち上げたんです。その二人が中心人物。それ以前の活動は床ヌブリは木彫りが中心で、「ユーカラ彫刻」なんて言われていた。四宅さんもアクセサリーなどを作っていたけれど、踊りの部門ではみんなを指導する立場にあって、阿寒湖アイヌコタンの古式舞踊の代表者であり、初代保存会長を務めたんです。床ヌブリは若い頃、コタンに入る前に東京にいて、そのころ文学座とか演劇関係の友人がたくさんいたんですね。そういう仲間の中でいろんなことを見たり手伝ったりしてきている。だから舞台っていうものとか、台本をどう作るのかとか、演技のこととかも、覚えてきたんじゃないかな。そういう環境にあったんですよ。だから台本は床ヌブリが作った。彼は本当に、人材を発掘するのに長けているというか、よく人を見ている人で、その力にはちょっと驚くくらいです。

——：最初のころは、ユーカラを演劇にした学校の先生と一緒にやっていたと古い報道にありました。

床明：釧路の学校の先生がユーカラを題材にしたお話を考えて持ってきてくれて、その後に札幌で放送劇にした先生もいて。釧路の先生は音楽をやっていた人で、ピリカピリカの歌をアレンジしていた。台本は最初、「コタンの森」というタイトルで、秋辺今吉さんがシカンナカムイの役をやって、素晴らしいポスターもできた。最初は1972(昭和47)年に札幌で、日本交通公社の全国大会というのに四宅さんが参加していて、そこでちょっと一部、まだ完成してはなかったんだが、披露した。それがまず始め。1週間後に札幌市民会館でも同じものをやった。次の年に、釧路の厚生年金会館で本格的な舞台を一つの流れでやりました¹⁾。

——：この時の様子は新聞に「アイヌ語版で上演」と書いてあります。

床明：セリフはほとんどないんです。台本には、例えばコタンコロカムイが冒頭で「昔私が若いときには……」と語るセリフがあるけれど、これをアイヌ語版でやったのはパリ版。コタンコロカムイ役の豊岡喜一郎さんが、山本多助エカシが書き起こしたアイヌ語の語りを、「テエタオッタ……」とずっとやった。よく覚えたなと思うくらいしゃべりましたね。時間の制約があるから、書いてもらったのをすべてを話したわけではないけれど。パリ公演のほうはコタンコロカムイの役者のセリフはすべてアイヌ語だったけれど、そのあと日本でやった方は日本語にしたんです。主人公ラックルが育ての姉によびかけるアイヌ語は、あまり多くないですよ。「狩りに行きたいが、どうか」とね。イレシュサポ²⁾の最初の役者は釧路で日本舞踊をやっていた方。この方の娘さんと、もう一人とこの方の3人で、白鳥姫、黒鳥姫、イレシュサポを演じた。パリ公演から、90年代に日本の色々なところで公演するころまでずっとやってもらった。ある時期から、コタンのみんなだけでやるようになった。

——：公演の中身について伺えますか？

床明：まず「プロローグ『コタンコロカムイの話。』」の語りがある。そのあと「第一幕第一場 天と地

(シカントモシリ)」³⁾で、ユーカラクルとヘツチェクルが舞台そでで語っている。舞台中央、チキサニカムイが踊っているところに、シカンナカムイが真ん中の高い台の上から現れる。そしてシカンナカムイ役の秋辺今吉さんがタブカラ(踏み舞)という踊りを舞う。声もいいし、素晴らしかった。ああいう声はなかなか出せない。そして最後にチキサニカムイのところへ来て、雷鳴がどどんと舞台上に鳴り響いて、シカンナカムイが衣装の袖でチキサニカムイをさっと隠すことで、結婚したということ表現した。それでアイヌラックルが生まれ、次の神の家のシーンが始まる。このときチキサニカムイは弟子シギ子さん。このカムイの役の三人とユーカラクル、ヘツチェクルは、冒頭にしか登場しない。

——：迫力あるはじまりですね。

床明：実際の物語が始まるシーン(第二場 神の家(カムイ・チセ))では、四宅(ヤエ)ばあちゃんのイフケが後ろで流れていて、そして照明がつくとアイヌラックルとイレシュサポの二人が舞台に居る。ラックルは最初イナウケをしていて、そのあとイレシュサポに「狩りに行きたい」と呼びかける。「イレシュサポ、イレシュサポ、キマイネヌ ルシュイ、キマイネヌ ルシュイ」と。セリフは台本に書いてあるものだけ。ちょっと間をおいて、サポは首を振る。そのうちラックルが彫ったものをみて、やっとな狩装束を出してくれる。それでラックルは狩に出かける。次は「ユックコイキ」、鹿狩りの場面(第三場 鹿狩り(ユックコイキ))。このシーンは、セリフはほとんどなく川のせせらぎや小鳥の声などの効果音だけ。カーン、コーンという音が鹿の足音を表現している。そして鹿神とラックルが二人きりで対峙する。ラックルは弓の舞をして周りを舞いながら、最後に鹿を射止め、鹿神はラックルの矢を受け取る。この所作がとても格好良かった。弓の舞は今と大体同じ型のものだけれど、舞台に合わせて鹿の周りを舞うなど違うところもある。鹿の役は、角がついた鹿の頭を持っている。そして頭の飾りとイナウを立てることで神であることを示している。この鹿の頭も角も木彫りで、差し込んで取り外せるようにしてパリまで持って行った。作家は瀧口政

満さん。いまでも大切にとってある。

——：鹿の神とのシーンが終わると、白鳥姫と黒鳥姫のシーン(第四場 白鳥姫と黒鳥姫(レタラチカップ、クンネチカップ))ですね。

床明：この場面は、バックにピリカピリカの歌がわーっと流れている。そして白鳥姫が中央にいて踊っている。白いマントがわっと広がる創作舞踊で、鶴の舞とはまた違う。そこにラックルが上手から、鹿の角を背負って弓と矢筒を持って現れる。中央に座って、鹿の角を置いて白鳥姫の踊りを見る。終わり頃になってから、白鳥姫がおもむろに自分のマンプシを外してラックルに差し出す。そこで舞台の高い台の上から、黒い装束の黒鳥姫が現れる。そして白鳥姫が今まさにマンプシを渡そうとする時に、ぱっとその手を跳ね除ける。同時に、ラックルは目が見えなくなって唸っている。白鳥姫が立ち向かっていると、魔人たちが4人入ってきて、白鳥姫を背負って闇の国へ攫い、下手へ抜けて、幕。冒頭ラックルが上手から出てくる時には、「ハンルレー ホォーイ ハッホー」という歌を歌いながら出てくる。白鳥姫と黒鳥姫が戦う時の背景には、「フッタレチュイ」が流れる。このシーンの音はこのアイヌ語の歌だけ。

——：いよいよ「第五場 神の刀(カムイ・タム)」ですね。

床明：目が見えなくなったラックルが、下手からよろしながらか出てくる。舞台はラックルの家で、奥には戦いに備えた神の刀などがすでにチタラペに下げている。イレシュサポが座しているところにラックルがよろしながらか来て、イレシュサポと対峙する。イレシュサポがラックルの両手をとって仕草をみると、目が見えるようになる。イレシュサポはそこで初めてラックルに、自分が誰なのか、ラックルは誰なのかを話す。ラックルはここまで、カムイの子供であるということは知らなかった。そのあとラックルは、イレシュサポから神の刀と装束を与えられ、刀を受け取ってから、「チュブカムイホー イレシュサポホー パセヤイライケレホー」と叫ぶ。イレシュサポのセリフは録音したものを流すという方法をとっていたが、ラックルのアイヌ語の叫びは役者が話した。

——：いよいよ最後の戦いですね。

床明：第六場「暗黒の国の戦い(クンネモシリ・ド

ミ)」は、闇の国が舞台。真っ暗いなかでムックリの音が低くポンポンボンとなっている。大魔王たちは酒盛りをやっているところに、ラックルが上手から現れる。黒鳥姫がラックルをめざとく見つけ、「アイヌラックル!」と叫ぶ。パリ公演時の大魔王は秋辺デボさんの親戚。体格がよくて良い男なものだから魔王役に抜擢されたんだ。黒鳥姫が「ラックルだ!」と叫んだあと、ラックルは魔王に招かれて、みんなが座っている炉縁の前に座る。そして戦いの前にお酒を飲み合い、挨拶をしあう。そうしている中で魔神の一人は早くも突っかかっていこうとするが、魔王に嗜められて止められる。みんな殺気立っているけれど、お互い儀式をして、礼を尽くしてから戦いに入る。魔神4人が盃を放り投げて立ち上がり、ラックルの周りを取り囲み、撃ち合いをする。この時の武器は、魔神は真っ黒な棒、ラックルはイナウがついた真っ白い長い棒を持っている。もはやこれまで、となってから、イナウのついた白い棒をぱっと投げすてて、神の宝刀を抜く。そこで稲光と雷の音が鳴る。そこで魔王と黒鳥姫を切り伏せる。ラックルにスポットライトが当たるとともに、魔神たちはうめきながら下手へ退場。陰で黒いマントに隠れて待っていた白鳥姫がバツと立ち上がり、ラックルが白鳥姫に、オンカムイ(礼拝)、そして客席に向かって3回、オンカムイをする。

——：舞台上の動きや構成の演出をつけていたのは、床ヌブリさんですね。

床明：そうそう。そういうところがやっぱりいろいろ見てきた彼の資質だろうね。アイヌの舞台ではないけど、東京で見てきた役者たちの様子とか、そこから視点が育ったのかな。

——：四宅さんは一緒に演出をしていたんですか？

床明：いや、自分の場面のところに基本的にはくるけれど、つきっきりでそこにいたということはない。みんな通して練習するような時には四宅さんもいたし、四宅さんを含めみんなでああした方がいいとは言い合った。ヌブリの演出の補佐のような、もっとこうしたらいいとか、そういう役割はあった。

——：パリ公演での明さんの役割はなんでしたか？

床明：魔神だね。魔人4人と魔王が居たんだ。

——：ヌブリさんの演出スタイルはどんな感じでした

か？

床明：あんまり細かいことは言わないよね。ポイントをうまく言う人だった。

——：今でこそ阿寒の皆さんは様々な舞台を作っていて、いろいろな挑戦もされてきていると思いますが、この時はストーリーのあるような舞台は初めてだったのでしょうか。とまどいとかはありましたか？

床明：まさにそうだね。かなり不安だったよね。古式舞踊であちこち公演することはあったから、舞台慣れみたいなものはあったけれど、演劇は初めてだった。

——：パリでの思い出はありますか？

床明：アイヌの劇を見てわかってもらえるだろうか、向こうの人はどうやって理解するだろうかというのが一番心配だった。ところが、領事館の人が言うには、パリの人は演劇を見る目は確かだと。外国のものも知ろうと努力するし。そういう人たちだから、わからなさそうでも理解しようとしてしっかり見てくれるから、安心してやりなさいというようなことを言ってくれたのが一つの救いだった。

——：お客さんの反応はどうでしたか？

床明：もう新聞にあるとおり⁴⁾、大爆発。拍手が止まらないので、舞台上で「もうそろそろ下がっていいかな」と思っても「ダメだ動くな」と(いわれると)いう感じだった。パリ公演はユネスコ本部のホールと、ギメ東洋美術館の小さなホールでやったけど、釧路や札幌で公演したときは全然違う。ユネスコの方は四宅さんがアイヌラックルの役だったが、ギメは配役を変えた。床ヌブリは、「お前たちいつもアイヌ舞踊やっているんだから、その気持ちさえ忘れなければいいんだ、いつもやっているようにやればいいべや」と言っていた。それもまた救いだった。いつもやっているようにやればいいんだと。みんな舞台慣れはしているんだから。だからそれ以上細かいことは言う人ではなかった。

——：忘れられない経験ですね…。ところで衣装は誰が作ったんですか？

床明：ヌブリがこういう形にしようといっって、コタンの奥さんがたみんなで作った。

——：練習はどこでしてたんですか？

床明：オンネチセの裏に、「アイヌ観光センター」と

というのが以前あった。その2階に大きな広間があって、コタンに買い物に来るお客さんがそこで食事ができるような施設があった。まりも祭りもそこでやって、ご飯食べて、寝泊まりして、朝まで騒いだりしていた。そこは、今の「ウヌカラチセ」(釧路市阿寒町緑町生活館)の2階にある和室より倍くらい大きかった。厨房がついていて、団体客を受け入れられるようになっていた。こういう場所で練習したり、舞踊を披露したんだ。観光センターは今取り壊されてない。そのあと1985(昭和60)年に「アイヌ文化伝統・創造館 オンネチセ」ができた。最初はヨシ葺き小屋だったのが、10年目にいまの鉄板屋根の形になった。でも骨組みとか土台は茅葺き小屋の時のまま。もう40年近くずっと建っている。大きな建物だからアイヌ式の屋根にできず、合掌組という組み方で組まれている。杉の丸太の梁は、外国の材料を手配した。みんなで屋根を茅葺きしたんだ。今は「イオマンテ劇」をあちこちで呼ばれてやっているけれど、「ユーカラ劇」はしばらくやっていないな。

—：いくつかの新聞には山本多助さんが「ユーカラ座」を立ち上げたと書いてあったんですが、座長はずっと床ヌプリさんだったんですか。

床明：もともになる阿寒のユーカラを書き起こしてくれたのが山本多助さんだから、原作というところ。座長と演出はずっとヌプリと四宅さんだった。

—：パリに出発前の東京公演というのもあったのですか？

床明：パリ出発前に、東京の普門館というところで、前座でやった。この時は全部やったと思うなあ。どこかが映像撮ってないだろうか。

—：当時の情報が記載されたノート、すごくいろいろ書いてありますね。

床明：添乗員がいろいろ教えてくれたこととかを書いてたんだ。パリのホテルもちょうど立てたばかりのホテルで、開館前だったのに、経費を浮かすために泊めてもらったんだ。セーナ川の近くにあるニッコー・ド・パリ。資金繰りも大変で、全道に寄付を募った。でも当時は景気が良かったからね。観光ブームで、前田一步園の奥さんが、北海道庁とかに働きかけてくれて、かなりの寄付を募った。パリに行った時は、自分は30

歳代。千家盛雄さんはユーカラ座の音響をやっていた方。明日会うんでしょう？ぜひじっくりお話を聞いたらいいよ。

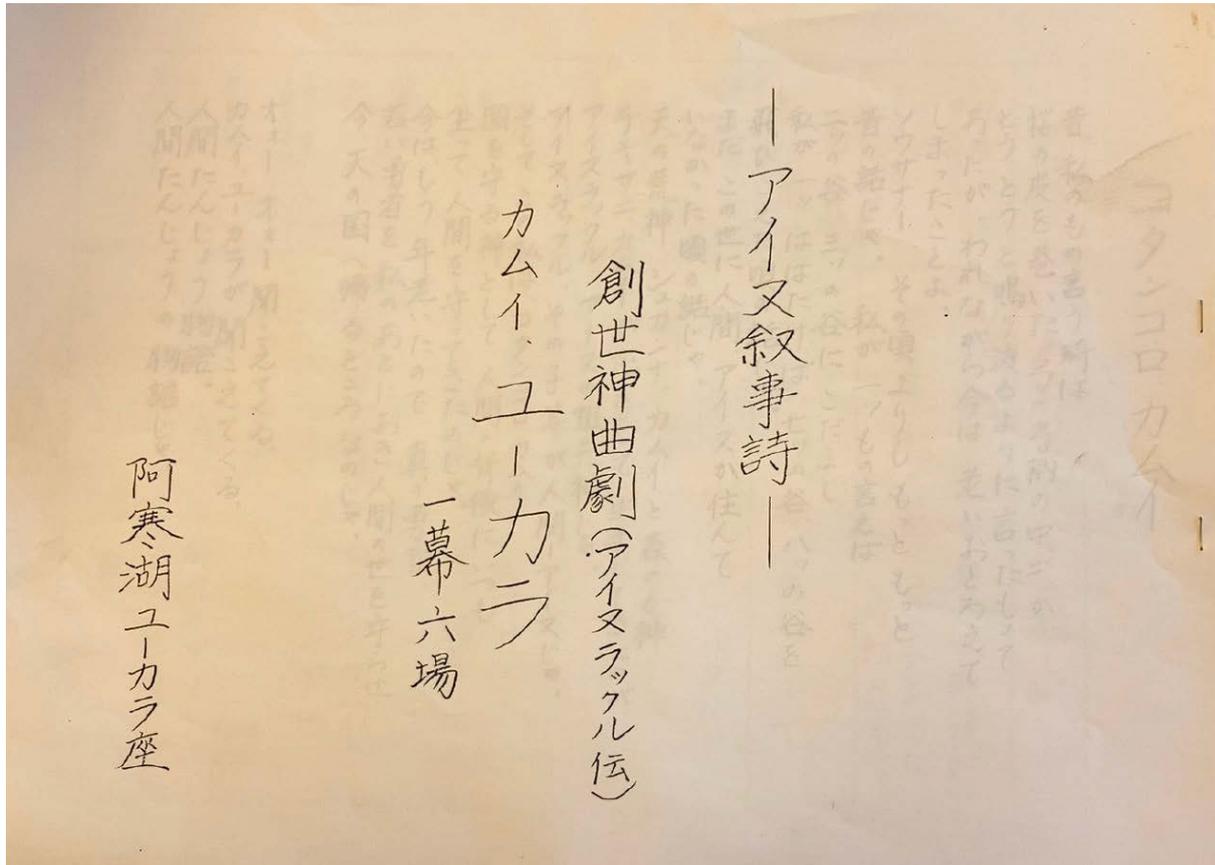
(了)

注

- 1) このころまでのタイトルは『コタンの森』。1976(S51)年2月25日北海道新聞によると、パリ公演から『アイヌ・ラックル伝』というタイトルになっている。
- 2) アイヌ語の表記は、台本の表記に準じた。
- 3) 幕・場の内容や番号は、床明氏に見せていただいた台本を基に記載している(日付不明)。ただし、1974(S49)年の札幌上演版は2幕7場、パリ版は2幕6場とそれぞれ新聞に記載があるので、本インタビューにある1幕6場の形式になったのはパリ公演の後。
- 4) 1976(昭和51)年4月30日の北海道新聞では「パリっ子熱狂『ユーカラ座』公演ラストで拍手“爆発”『ともかくすばらしい』」と報道された。

【床明氏提供資料】

1. ユーカラ劇台本 (1幕6場版 / 発行日不明)



<p>プロローグ 『コタン・コロカムイの話し。』</p> <p>SE 風の音 (歴史を語るように) 照明 コタン・コロカムイ スポット</p>	<p>コタン・コロカムイ 舞台中央 (板付) 風の音の中、コタン・コロカムイの話し。 (暗転退場)</p>
<p>SE ユーカラ SE シンカント 照明 ユカラと ヘッチェ、クル (イヌンベに交)</p> <p>SE 風の歌 照明 (子キサニ)</p> <p>SE 雷鳴 シカンナカムイ 三発目で登場</p> <p>壇上で死 下りながら死 照明、子キサニ 子キサニ</p>	<p>第一幕 第一場 天と地 (シンカント、モシリ)</p> <p>ユーカラ、クルとヘッチェ、クル 舞台上手又サ前で ユーカラを語っている。</p> <p>子キサニ、カムイ (板付) 子キサニ 静かに舞い踊る。</p> <p>三発目の雷鳴で シカンナ、カムイ 登場</p> <p>タプカラの舞 やがて、雷鳴と雷光の中で 結ばれる。 暗転</p>

2.

第二場
神の家 (カムイ子セ)

SE
イフンケ

太陽と月に輝くカムイ子セ

イレシユサポ上座に坐り刺繍している。
ラックル下座で狩りの道具に彫刻を
している。ラックル弓を持ち、矢を射る
動作をしながら

(イレシユサポ)

(キマイネヌ、ルシユイ)

と、山狩の許しを乞う。

イレシユサポ首を横にふり、なかなか
狩りに行くことを許さず。

ラックル

(イレシユサポ)

イレシユサポなおも許さず。

ラックル

(キマイネヌ、キルシユイ)

腕を曲げ胸をたたき、大人になったことを示す。

そして、自分の彫刻した矢筒を見せる。イレシユサポ
それを見て喜び、山狩りに行くことを許す。

ラックル、いやしく拝礼して感謝。

サポは狩り装束を出して、ラックルに着け

させる。そして最後にラックルの左手に

手甲をつけてやる。ラックル喜び勇み狩り

に出かける。(下手)

サポ心配そうに見送る。

暗転

第三場
鹿狩り (ユックコイキ)

SE
小鳥の声
小川のせせぎ

深い森の中

ラックル、小鳥の声や小川のせせらぎに
聞き惚れながら、楽しそうに登場

(下手より上手に)

カーン、コーン

遠くに近くに大鹿の足音

やがてユックカムイ登場(下手)

大鹿を見たラックル、矢を射ようとしたが、
ただの鹿でないことに気付き、うやうやしく
礼拝。弓の舞を踊る。ユックカムイも共に踊る。

ユックカムイ、ラックルの矢を受け取る。

二人相対座。

(中央)

ラックル、ユックカムイのために、イナウを
けずり、ユックカムイに渡す。

ラックル

ユックカムイが神の国へ帰るための美しい

道をつくるためにウコッセとともに

天に向かって矢を射る。

ユックカムイはラックルが大人になった

ことを喜び、

天の国へと帰る。(上手)

見送るラックル

暗転

第四場
白鳥姫と黒鳥姫 (レタチカップ、クンネチカップ)

SE ピリカ、ピリカ

SE (ラッフル)
ハルレ
ホホイ
ハット

SE 風の音

SE フタレ、テイ

(白鳥姫板付)
白鳥姫の舞
遠くからラッフルの歌声

ラッフル登場 (上手)
白鳥姫の舞いに見惚れる。上手に坐って
やがて舞いが終り、白鳥姫はラッフルに
求愛のマタンプシを渡そうとする。

突然、黒鳥姫登場。ラッフルと
白鳥姫の仲を裂く。
黒鳥姫もラッフルに求愛のマタンプシを
渡そうとするがラッフルにはねのけられる。
いかり狂った黒鳥姫は、魔の力をもって
ラッフルの視力を奪う。

黒鳥と白鳥の戦いの舞
戦いの舞いの中、魔神達登場
黒鳥を助けラッフルに戦いを挑む。
やがて白鳥姫は魔神達に闇の国
へと連れ去られる。
黒鳥姫、ラッフルをけり上げ、
マタンプシで打ちつけ、闇の国へと
消えて行く。

暗転

第五場
神の刀 (カムイタム)

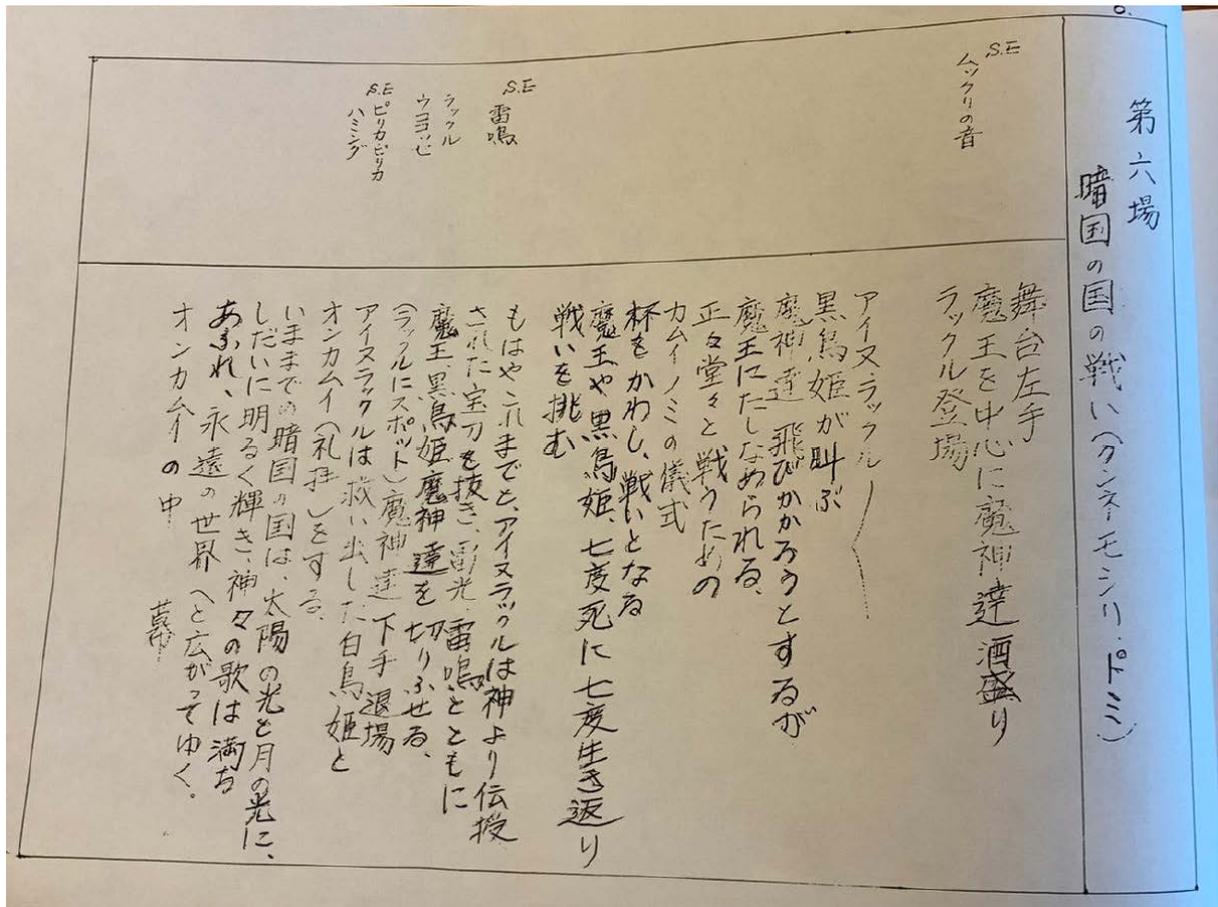
太陽と月に輝くカムイチセ。
今は神の衣装に身をまとった
イレシユサホ神の力をもって、ラッフルを
山城へ迎へられる。

演技 (イレシユサホ)
— 演技 —
そうです。私はイレシユサホ育ての
姉なのです。あなたはシカンナ、カムイ
天の荒神とチキサニカムイ、ハルニレの
女神のあいだに生まれ、神の子
なのです。
私は神の子であるあなたを、大切に
育ててまいりました。
これがあなたの運命なのです。
さあ、この刀、神の刀と神の衣装を
あたえます。

闇の国へ行き、白鳥姫を救いなさい。
— 演技 —
神の刀と衣装を身につけたアイヌラッフル
力強く刀を抜いて叫ぶ。
チヌカムイ、ホー、イレシユサホ、ホー
パセヤイライケレ、ホー

さあ、アイヌラッフル、勇気をもっておゆきなさい。
— 演技 —
見送るイレシユサホ

暗転



上記は1幕6場版。パリ版の構成は以下。

第1幕

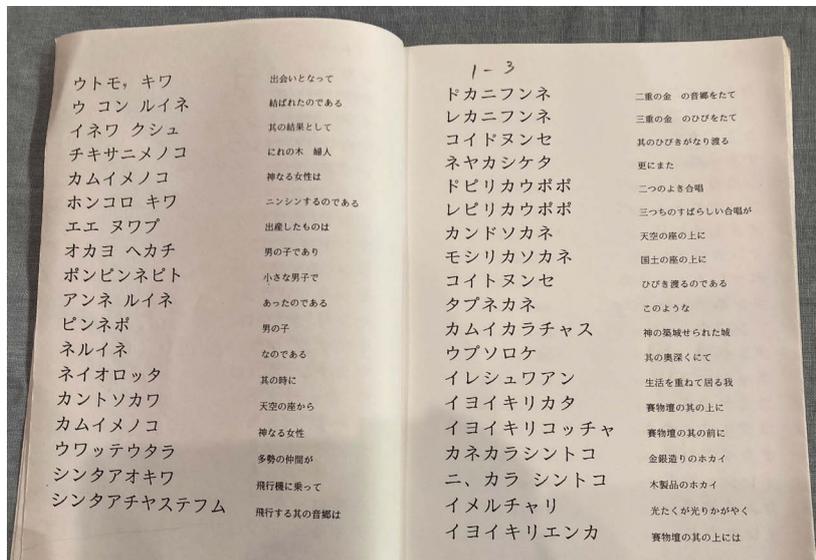
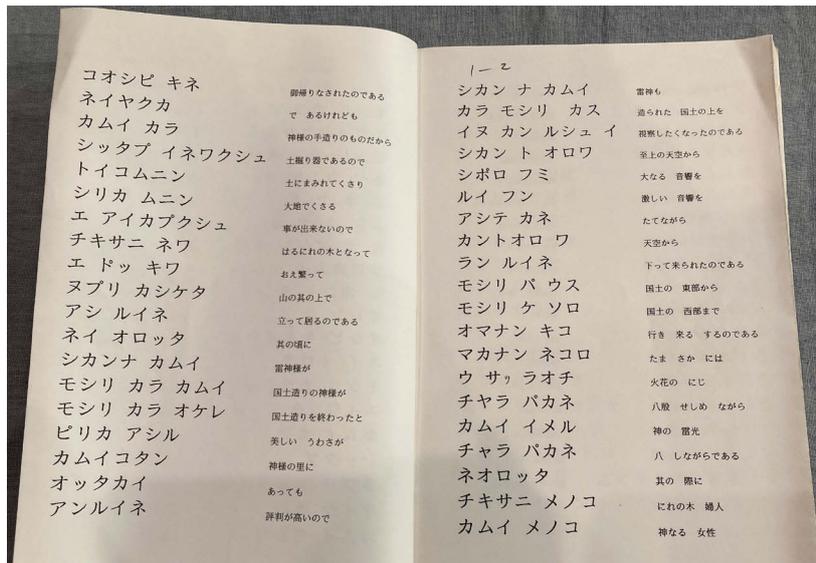
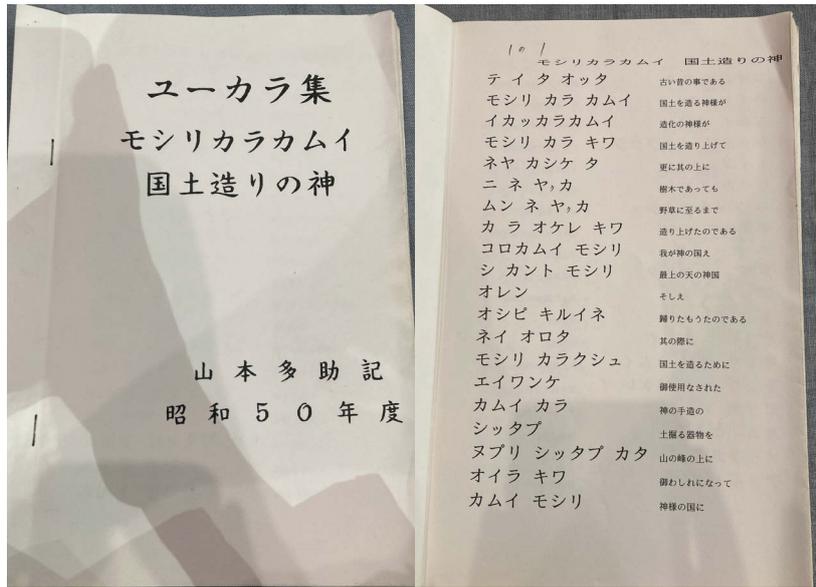
アイヌラックルの誕生 (シカント・モシリ 天上界)
 イレシュサポ (養育する姉) (カムイ・チセ 神の家)
 鹿狩り (ユックコイキ)

第2幕

白鳥姫と黒鳥姫 (レタラチカブ・クンネチカブ)
 神の刀 (カムイ・タム)
 暗黒の国の戦い (クンネモシリ・トゥミ)

出典：「久摺(クスリ) 山本多助エカシ生誕百年記念特集号」(釧路アイヌ文化懇話会、2005年) p97.

2. 山本多助による、「プロローグ：コタンコロカムイの話」の元となったユーカラの原稿(一部)



3. パリ公演の際の写真



エッフェル塔を背景に記念写真(1976年パリ公演より)：

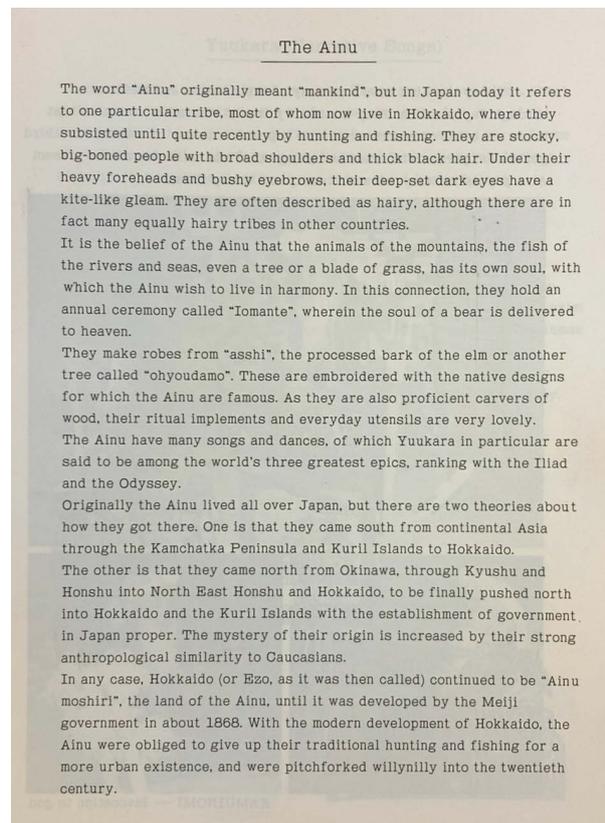
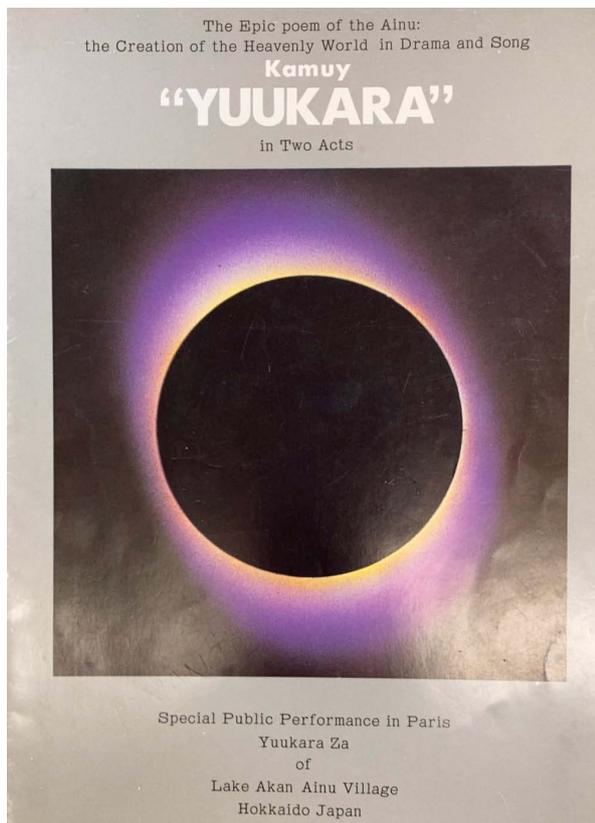
後列右から…	コタンコロカムイ	豊岡喜一郎
アイヌラツクル	山本俊一	
シカンナカムイ	秋辺今吉	
ユーカラクル	山本多助	
ヘツチエクル	西田トセ	
イレシユサボ	花柳寿登芳(中村芳子)	
チキサニカムイ	弟子シギ子	
クンネチカブ	花柳寿芳記(藤田孝子)	
レタラチカブ	石田敦子	
丹葉節郎		
ウエンカムイ	秋辺金市	
前列右から…		
ウエンカムイ	床明	
アイヌラツクル	四宅豊次郎	
ウエンカムイ	小林隆男	
ウエンカムイ	鯉屋進	

*名前の同定は床明さんに聞いたものと、「久摺(クスリ) 山本多助エカシ生誕百年記念特集号」(釧路アイヌ文化懇話会、2005年)96ページの、パリ公演の後に訪れたローマ市内で撮影された写真の名前を参考にした。



対決のシーン (1976年パリ公演より) :

4. パリ版 公演パンフレット (英語)



Today the Ainu have lost many of their habits and customs through Japanisation. They intermarry freely with other races, so that there are often occasions when it is impossible to say of a second or third generation person what race he belongs to. Thus estimates of the present Ainu population vary, between twenty and thirty thousand.



KAMUINOMI — Invocation to god

Yuukara Drama

Special Public Performance in Paris

Long, long ago, the gods in heaven decided to create the world, so they chose a god of creation and asked him to go down and make the Earth. So down he went with the Dog God the Eagle Owl God and they all worked very hard to make the Earth. So hard did they labour that a wonderful land was created in an instant. The works of the God of Creation were highly praised by the gods in heaven.

The first tree the God of Creation planted with his own hands was the Elm, making the land still more and more beautiful. At this point, the yuukara begins.

Hearing all the talk about the beautiful land beneath, the God of Thunder became very curious and decided to go and have a look for himself. One day, the God of Thunder went down to the Earth in a storm of thunder and lightning, of black clouds and white. Three times he flew into the furthest East, and three times into the remotest West, looking closely at the Earth. And indeed the land was even more wonderful than he heard. As he was inspecting the Earth, the God of Thunder suddenly discerned a woman standing in the forest. Bending closer, he saw that she was as beautiful as the most beautiful goddesses of heaven, though there were many beauties there. This lovely girl was Princess Harunire or Chikisani, Princess of the Elm. The God of Thunder fell instantly in love with her, and they married.

She bore a son. And the son she bore was Ainu Rakkuru, a god in human form. The boy was raised in the care of the Sun's younger sister, and as he grew, his exploits in turn became a story to be told in yuukara, a story developing in mystery, telling in song and dance of loves and battles long ago, before mankind began.



CHIP

Synopsis

Yuukara Drama

Act I

Scene 1: The Heavenly World (Shi Kanto Moshiri)

Shikanna Kamui, God of Thunder, in command of the Universe, descends to Earth, and catching sight of the most beautiful princess Chikisani of the Elm Tree, falls instantly in love with her. His descent is as gentle as a thistle down but in a ball of flame, and when they marry, it is as one flame they burn. Shikanna Kamui and Chikisani have a son, the hero Ainu Rakkuru, who is to become the protector of the Ainu people.

Scene 2: The Home of the Gods (Kamui Chise)

In the home of the gods there is a discussion about who should bring up Ainu Rakkuru, and it is decided that Ireshu Sapo, the Sun's younger sister, should bear this responsibility. As he grows, Ainu Rakkuru prepares himself for the hunt, making bows and arrows from wood. At last he receives Ireshu Sapo's permission to don his hunter's costume. He goes out to the mountains to hunt deer and prove himself a fully-fledged God of the Ainu.

Scene 3: The Deer Hunt (Yukku Koiki)

To test the power of Ainu Rakkuru, the Deer God comes down from heaven to the deepest part of the forest. Ainu Rakkuru succeeds in shooting the Deer God, and then goes to pray for his soul. As the Deer God returns to heaven, Ainu Rakkuru shoots an arrow into the sky to clear a path for the ascent of the Deer God's soul.



Act II

Scene 1: White Swan Princess and Black Swan Princess (Retarachikappu and Kunechikappu)

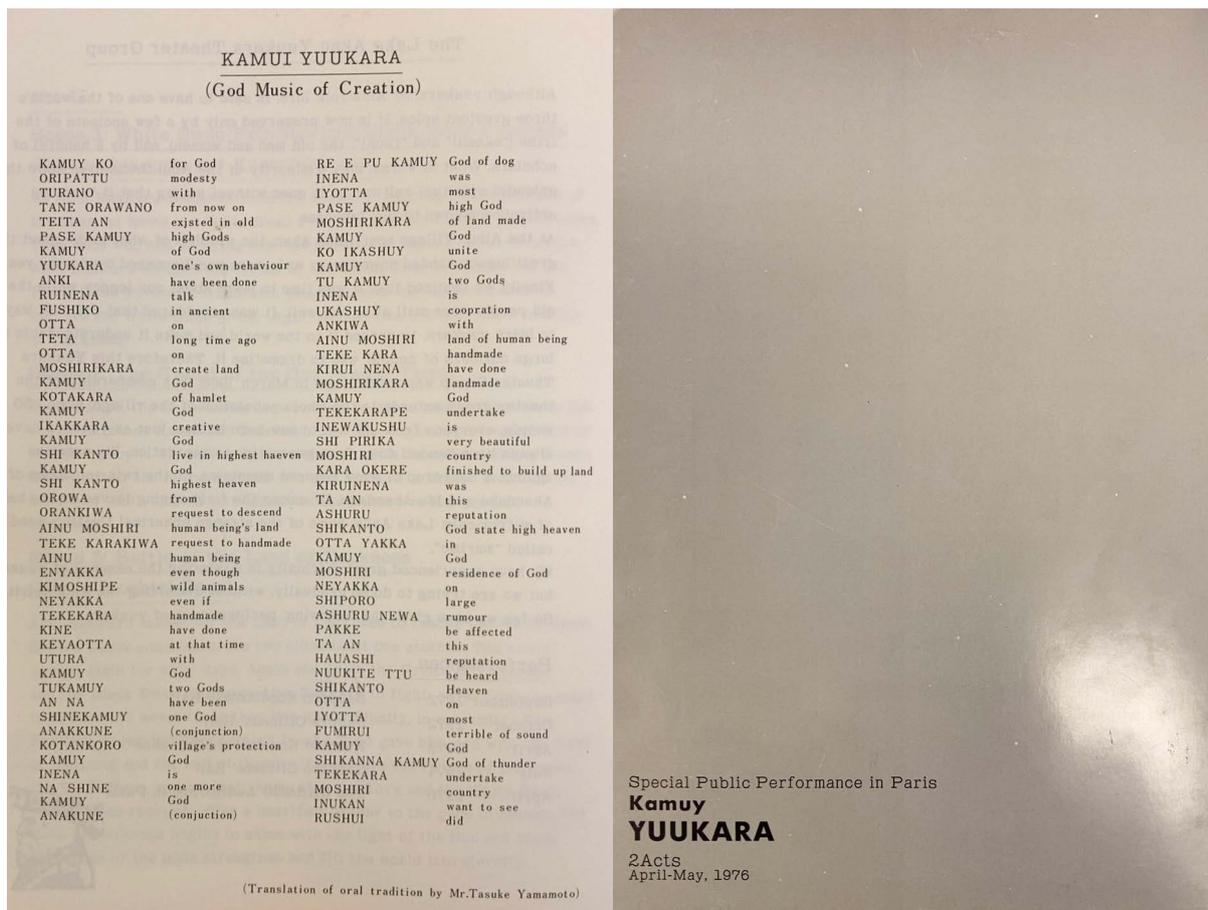
As Ainu Rakkuru descends from the mountain, bearing the great head of the deer, he meets the White Swan Princess and the Black Swan Princess. They both woo him, offering him "matanpushi" or embroidered wirework. Ainu Rakkuru accepts the favour of the White Swan Princess, but the Black Swan Princess, filled with jealousy, uses her magic powers to deprive the White Swan of her sight, and carries her off to the country of Darkness.

Scene 2: The Sword of the God (Kamui Tamu)

Ireshu Sapo, the Sun's sister, now reveals to Ainu Rakkuru that he is the son of Shikanna Kamui and Chikisani. The son of gods, and himself God of the Ainu people, his destiny is to create a peaceful land for mankind. Ireshu Sapo clothes him in the costume of a god and puts a bright sword in his hand, and like a lion he strides out on his journey to the Land of Darkness.

Scene 3: Battle of the Land of Darkness (Kunne Moshiri Domi)

Ainu Rakkuru leaves for the Land of Darkness to rescue the White Swan. Before battle commences, the two sides toast one another. The mortal combat lasts for many days. Again and again the Prince of Darkness and the Black Swan challenge Ainu Rakkuru to fight: seven times he slays them both and seven times they live again. Finally, in extremity, Ainu Rakkuru draws the sword which Ireshu Sapo gave him, and with the flash of lightning and the roll of thunder, he defeats the Prince of Darkness, the Black Swan, and all their host. Ainu Rakkuru and the White Swan, whom he has rescued, offer a heartfelt prayer to the gods in heaven. The Land of Darkness begins to shine with the light of the Sun and Moon. The songs of the gods strengthen and fill the world into eternity.



5. パリ公演配役 (床明氏のノートによる)

阿寒湖ユーカラ座 パリ公演団 1976年4月

団長 山本多助

副団長 秋辺今吉

事務局長 四宅豊次郎

総務部(記録・会計・その他) 沢井春光

顧問 丹葉節郎(釧路ユネスコ協会会長)

スタッフ

脚色構成: 阿寒湖アイヌ民族文化保存会・阿寒湖ユーカラ座

演出・舞台監督 床ヌブリ

舞台助手・装置 西山一幸

音響効果 千家盛雄

パリ公演団書記・会計 沢井春光

ユネスコ関係 丹葉節郎

<スタッフ・キャスト合計20名>

キャスト

1. ユーカラクル 山本多助
2. ヘツチェックル 西田トセ
3. シカンナカムイ 秋辺今吉
4. アイヌラックル 四宅豊次郎
5. ユックカムイ 小林隆男
6. チキサニカムイ 弟子シギ子
7. イレシュサボ 中村芳子
8. コタンコロカムイ 豊岡喜一郎
9. レタラチカプ 石田敦子
10. クンネチカプ 藤田孝子
11. 魔王 秋辺金市
12. ウエンカムイ 鱧屋 進
13. 同上 滝口政満
14. 同上 床明
15. 同上 山本俊一

◎ダブルキャスト

山本俊一 アイヌラックル、ウエンカムイ
小林隆男 ユックカムイ、ウエンカムイ

6. 阿寒湖ユーカラ座の歩み（公演パンフレット及び床明氏の記録から）

- ・ユーカラ座のパンフレットの記載と、床明氏提供の記録を合わせたものを掲載する。
- ・一部「ユーカラ座」以外のものも掲載した。

1968 (昭和43) 年 4 月	阿寒アイヌ民族文化保存会結成。 1) アイヌ舞踊研究保存部、2) アイヌ語研究部、3) ユーカラ座の3部門を置く。
1972 (昭和47) 年10月	札幌市厚生年金会館にて公演。(日本交通公社旅行クラブ全国交歓会) 札幌市民会館にて公演。(第一回全日本文化集会札幌大会)
1973 (昭和48) 年 4 月	釧路市厚生年金体育館にて自主公演。
1974 (昭和49) 年 7 月	札幌市民会館にて特別公演。 主催 北海道文化団体協議会・札幌文化団体協議会
1976 (昭和51) 年 4 月 〔フランス・パリ公演〕	17日 阿寒町・町民センターにて公演。 23日 普門館(東京都杉並区)にて一部公演。 パリ日本文化祭の東京での前夜祭。 28日 第1回ジャパンフェスティバル(日本文化祭) パリ ユネスコ本部・国際会議場にて公演 30日 パリ ギメ東洋美術館にて公演 主催: ユネスコ本部・日本ユネスコ協会連盟
1984 (昭和59) 年 1 月 10月	「アイヌ古式舞踊」が国の重要無形民俗文化財に指定される 舞踊劇「イオマンテ」第9回香港アジア芸術祭に参加
1985 (昭和60) 年12月 〔関西公演〕	3日 人権週間〔世界人権宣言37周年〕の事業として京都会館にて公演(昼夜2回)。 主催〔人権週間を考える〕京都府民実行委員会 部落解放基本法制定要求国民運動京都府実行委員会 4日 大阪市御堂会館大ホールにて公演 主催 大阪市人権啓発推進協議会・大阪市 5日 大阪市我孫市南中学校にて公演。 6日 〔人権を考える県民のつどい〕奈良県橿原文化会館大ホールにて公演。 主催 奈良県・世界人権宣言推進実行委員会 7日 大阪市矢田南中学校にて公演。
1991 (平成3) 年12月	阿寒町公民館大ホールにて公演。 主催 阿寒町・阿寒町教育委員会 札幌市教育文化会館にて公演(昼夜2回) 主催 (財)北海道公立学校教職員互助会
1992 (平成4) 年12月	久留米市民会館にて公演。 主催(財)福岡県教職員互助会 田川文化センターにて公演。 主催(財)福岡県教職員互助会
1993 (平成5) 年 6 月 10月	釧路市生涯学習センターにて公演。(昼夜2回) 〔ラムサール条約締結国会議開催記念〕 主催 釧路市・釧路市教育委員会・釧路市民文化振興財団 かでの2・7(札幌市)にて公演。主催 北海道 〔'93国際先住民年ウィーク イン 北海道〕
1994 (平成6) 年11月	青森市文化会館大ホールにて公演〔青森県教職員互助会設立30周年記念〕 主催 (財)青森県教職員互助会
1996 (平成8) 年 1 月 10月	イオマンテ劇をアイヌ語で公演 第8回アイヌ民族文化祭、函館市民会館 主催 北海道ウタリ協会 富山県高岡文化ホールにて公演(1時間公演) 主催 第11回国民文化祭富山県実行委員会、富山国際演劇祭実行委員会
2000 (平成12) 年10月	「イオマンテ劇」富山能楽堂にて公演 主催 (財)富山市民文化事業団、富山市
2002 (平成14) 年 4 月	「ユーカラ座」が公演主体となって、ブラジルの都市住民に先住民を紹介するための事業 「リトデパッセージ」(通過の儀式)に海外からの先住民として「ユーカラ座」が初めて 招聘され参加した。公演内容は「アイヌ古式舞踊」 14,15日 サンパウロ Agua Brancaparkにて公演 21,22日 リオ・デ・ジャネイロの Museu da Republicaにて公演 主催 インデオ発展協会 (Instituto de Desenvolvimento das Tradicoes Indigenas)
2003 (平成15) 年 2 月	「アイヌ古式舞踊」 20日 ニューゼaland・パーマストンノースの Rangitāne 部族のマラエ外で公演。 21日 オークランドコミュニティセンターにて意見交換。